

# 幕末期の「独逸学」と

## 『官獨逸單語篇』

荒木康彦

1

本来は蕃書調所・洋書調所・開成所といった徳川幕府の直轄教育機関に所蔵されたドイツ語書籍及びドイツ語単語集の性格の書籍は、明治維新直後に静岡藩の「静岡学校」（府中学問所）に部分的に引き継がれ、静岡県立中央図書館の「葵文庫」に現在は収録されている。その中で幕末期に輸入されたと考えることが出来る9点のドイツ語書籍、そして幕末期に我国で出版された1点のドイツ語の書籍と1点のドイツ語単語集の性格の書籍を、既に発表した拙稿<sup>1</sup>（「葵文庫」収録のドイツ語書籍と「独逸学事始」）において、書誌学的に考察し、これらの書籍が幕末期における「独逸学」の起源と関連を持つことを、採取した国内外の一次史料に立脚して厳密に論証した。

その11点の書籍をここでまた刊行年順に列挙すれば、以下の通りである。

- (1) D.Buddingh, *Alemannia. Deutsches Lesebuch, oder Sammlung einiger schönen Stücke aus den Werken der vorzüglichsten Schriftsteller Deutschlands*, Haag 1845.
- (2) H.Weiffenbach, *Leitfaden zum Unterricht in der deutschen Sprache und Literatur. Literarischer Lehrkursus zum Gebrauche der Königlichen Akademie der See- und Landmacht*, 2.verbesserte Auflage, Breda 1853.
- (3) Adolf Stieler, *Handatlas über alle Theile der Erde und über das Weltgebäude*, Gotha 1857.
- (4) P.L.Hoffmann, *Grammatikalisches Wörterbuch*, Hamburg 1858.
- (5) Heinrich Kiepert, *Neuer Handatlas über alle Theile der Erde*, Berlin 1861.
- (6) M.Block, *Die Machtstellung der europäischen Staaten*, Gotha 1862.
- (7) 『官獨逸單語篇』文久壬戌之冬刻成 洋書調所
- (8) H.Weiffenbach, *Leitfaden zum Unterricht in der deutschen Sprache und*

*Literatur.Literarischer Lehrkursus zum Gebraucher der Königlichen Akademie der See-und Landmacht*, 2.verbesserte Auflage, Jedo 3.Bunkiu (1863.)

- (9) W.Assmann, *Abriss der allgemeinen Geschichte in zusammenhangender Darstellung auf geographischer Grundlage*, 5.verbesserte Auflage, Braunschweig 1863.
- (10) T.C.A.Heyse, *Leitfaden zum gründlichen Unterricht in der deutschen Sprache*, 20.verbesserte Auflage, Hannover 1863.
- (11) *Königlich preussischer Staatskalender für 1865*, Berlin.

ここに挙げた11点の書籍の内、(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(9)・(10)・(11)が輸入された書籍であるのに対して、(7)・(8)が国内で、徳川幕府の直轄教育機関によって出版された書籍であり、しかも(8)はタイトルからも分かるように(2)を部分的に復刻したものに過ぎないが、(7)は独自に編纂・出版されたものであることは、幕末期の独逸学の歴史、延いては同時期の日独交渉史の上で、洵に刮目すべき点である。

(7)の『獨逸單語篇』は「葵文庫」所収の本<sup>2</sup>(以下、「葵文庫」本と略称する)以外に、早稲大学図書館所蔵の本<sup>3</sup>(以下、「早稲田大学」本と略称する)が知られていたが、従来この二者は詳しく比較されて来なかった。そして、私は武蔵大学図書館所にこの『獨逸單語篇』が所蔵されていることを最近見出すことが出来た(以下、「武蔵大学」本と略称する)。従来閲覧・調査した「葵文庫」本に続き、「早稲田大学」本も「武蔵大学」本も閲覧・調査することが出来たので、この三本を厳しく比較し、更に私が既に採取し、先に挙げた拙稿でも利用している幕末期の「独逸学」<sup>5</sup>や日独交渉史の一次史料と関連付けて、本書の歴史的意義及び歴史的背景を聊か論じてみたい。

## 2

この『獨逸單語篇』は縦約18センチ・横約124センチで、25丁から成る木版和装本である。この点は、(2)のH.Weiffenbachの著書の一部を復刻した(8)が、活版印刷による洋装本であるのとは異なっている。『獨逸單語篇』の表紙は「葵文庫」本・「武蔵大学」本・「早稲田大学」本の三者とも紙表紙であるが、「葵文庫」本の表表紙・裏表紙と「武蔵大学」本の表表紙・裏表紙—非常に摩れている—が図柄の入った黄土色の紙表紙で一致しているのに対して、「早稲田大学」本の表表紙・裏表紙は青色の紙表紙であることから、前二者のものが原表紙であり、「早稲田大学」本のは後表紙であろうと想われる。それから注目すべきは、通常の和装本とは異なり、向かって左に背がある点であり、これは内容を顧慮して、洋装本に倣ったものと言えよう。従って、題箋を失っている「武蔵大学」本を除けば、「葵文庫」本の題箋も「早稲田

大学」本の題箋も表表紙の右上に付いている。「武蔵大学」本も表表紙の右上が部分的細長くに変色しているから、矢張りこの部分に題箋が本来は付いていたが、それが失われたと推測される。「葵文庫」本の題箋も「早稲田大学」本の題箋も非常に摩れて判読しにくくなっているが、判読出来る限りでは前者には『獨逸單語篇』と、後者には『獨逸單語篇 全』とあり、非常に摩れているので確定的なこと言えないが、書体は一致しないようであり、従ってそれらが原題箋か後題箋かも判断出来にくい。それから、「武蔵大学」本の表表紙の右下に「佐藤用」と墨書されているが、この姓の人物については蕃書調所・洋書調所・開成所の関係史料からは現在のところ分らない。

次に扉は表表紙の見返しに貼り付けられた形をとっており、双辺の匡郭の中央部分に『獨逸單語篇』という内題があり、その向かって左下に「洋書調所」、その向かって右上に「文久壬戌之冬刻成」とされており、「葵文庫」本(写真1)・「早稲田大学」本(写真2)・「武蔵大学」本(写真3)とも、無論全く同じである。これは通常言うところの見返扉ということになるだろうが、こうなっているにはそれなりの理由があるとも言える。その理由は、恐らく以下のようなことと推測される。上述したように、『獨逸單語篇』は洋装本を意識して、向かって左を綴じて背にした為に、内題が刷られた扉が丁の表にならず裏になってしまうという奇妙な結果となることを避けるために、表表紙の見返しに本来の扉の裏丁を貼り付け、表表紙の見返しに本来の扉の表丁が来る結果となったのであろう。つまり、和装本でありながら、洋装本のように向かって左を綴じて背にしたことから来る矛盾の為に、扉が表表紙の見返しに来ること



写真1



写真2



写真3

になったとも言えよう。また、扉には「洋書調所」とされているものの、この本の編者名は刷られていない。

既述のように、本文は25丁から成っており、上部のみに魚尾がある版心に「一」から「二十五」までの漢数字が丁数として刷られており、更に注目すべきは、洋装本に倣って上欄の左端乃至右端にアラビア数字で「1.」から「49.」までの頁数が刷られているが、25丁裏には頁数は刷られていない。各丁は単辺の匡郭となっており、丁の表・裏には基本的に縦2本・横19の界線が刷られている。言い換えれば、各丁の表・裏は20行、左右2段ににけられており、従って各丁の表・裏には基本的には40欄があり、そこにドイツ語の単語が刷られている。1丁表から25丁表まで、言い換えれば1頁から49頁までに、後に詳しく触れるような、合計1780のドイツ語の単語のみ一訳語は刷られていないが、22の分野に分けて、収録されている。上述のように25丁裏には頁数が刷られていないのは、そこはドイツ語の単語が刷られていない為であろう。

ここで最も刮目すべきは、所蔵印であろう。「葵文庫」本・「早稲田大学」本・「武蔵大学」本とも現所蔵館の印以外に、旧所蔵印が押されており、それらはこの3本の来歴等を考察する上で決定的な重要性を持つからである。

「葵文庫」本の場合、1丁表の右肩に、縦約4.8センチ・横約3.3センチの「静岡学校」の朱印が押されている（写真1）。それから、この1丁表には所蔵印以外に、上欄の左端に「No.300.」と朱書されている（写真1）のが、注目される点である。「葵文庫」収録の他のドイツ語書籍を幅広く調査して、この種の朱書のナンバーは静岡学校時代かそれよりも後の時代<sup>6</sup>に書き込まれたものであることを解明することが出来た。従って、この「No.300.」の朱書も同断であろう。「葵文庫」本の25丁表の右欄の19行目から20行目の右端に縦約2.2センチ・横約1センチの「調所」の長方形黒印が押されており（写真4）、扉に「洋書調所」と刷られていることから、「調所」とは洋書調所を意味するものとも言えよう。

「早稲田大学」本の場合、1丁表の右肩に縦約6.3センチ・横約3センチの「洋書調所」の長方形朱印が、同じ1丁表の左肩に縦約3.4センチ・横約3.4センチの「山岸文庫」の正方形朱印が押されている（写真2）。そして、25丁表の右欄の19行目から20行目の右端に縦約2.2センチ・横約1センチの「調所」の長方形黒印が押されており



写真4

(写真5)、25丁裏の左肩にも1丁表にあるのと同じ「洋書調所」の長方形朱印が押されている(写真6)。この「早稲田大学」本の来歴等を知る上で非常に重要な手掛かりと想えるのは、裏表紙の見返しの下下に「開成所句讀本」と墨書されている(写真6)ことである。

「武蔵大学」本の場合、見返し扉の左肩に縦約3.5センチ・横約3.3センチの「木邨信造記念文庫印」の方形朱印が押されている(写真3)。更に1丁表の左肩に縦約6センチ・横約3センチの「武蔵高等学校図書」の長方形朱印が押されており(写真3)、17丁裏の右欄18行から19行の右端に直径約1.7センチの「武高」の円形朱印が「隠印」として押されている(写真7)。そして、25丁裏に縦約3.2センチ・横約4.9センチの「購入 武蔵高等学校 年 月 日」の楕円形朱印が押されており、「購入」の下に「No.4673」、「年」の前に「2599」、「月」の前に「7」、「日」の前に「1」と黒色インクで記入されている(写真8)。それは言うまでもなく、武蔵大学の前身の武蔵高等学校が昭和十四年七月一日に購入したものを示している。

また、「葵文庫」本・「早稲田大学」本・「武蔵大学」本のいづれにも、小口書や奥書等は一切ないことも付言しておかねばならない。

上で考察した「葵文庫」本・「早稲田大学」本・「武蔵大学」本にある所蔵印から、この三本の来歴をここで整理しておきたい。

先ず、「葵文庫」本の場合、文久二年に洋書調所で刊行された後、「調所」の黒印があるところから洋書調所で使われていたが、それが明治維新後は静岡藩の「静岡学



写真5



写真6



写真7

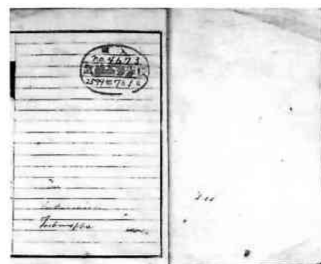


写真8

校」(駿府学問所)の蔵書となり、廃藩置県後に静岡師範学校(明治八年開校)へ、更には静岡県立葵文庫(大正十四年開館)へ引き継がれ、現在は静岡中央図書館の葵文庫に収録されていると言えよう。<sup>7</sup>「早稲田大学」本の場合も、文久二年に洋書調所で刊行された後、「洋書調所」の朱印が1丁表と25丁裏にあることから、確かに洋書調所の蔵書となっていたことは明白である。本論の冒頭で挙げた(8)の書籍は葵文庫に2部収録されているが、その内の1部の扉(写真9)と最終頁(写真10)には「早稲田大学」本の『獨逸單語篇』に押されているのと同じで、縦約6.3センチ・横約3センチの「洋書調所」の朱印が押されており、もう1部の扉の右肩の縦約6センチ・横3センチほどが切り取られ朱印の上辺の外枠部分が残っている(写真11)ことから、そこには「洋書調所」の朱印があったと推測され、最終頁に「洋書調所」の朱印が押されている(写真12)。そして、この2部とも裏表紙の見返しに縦約2.8センチ・横約1.5センチの小判型の「洋調」の黒印が押されている(写真10・写真12)。こうした形で「洋書調所」の朱印のある(8)の書籍は複数存在していることから、それらは独逸学の教材等として洋書調所に所蔵されていたと判断される。またそれ故に、『獨逸單語篇』が複数現存し、葵文庫収録の(8)の書籍と同じような形で、二箇所に「洋書調所」の朱印のある「早稲田大学」本の『獨逸單語篇』も独逸学の教材等として洋書調所に所蔵されていたと判断される。私が調査した限りでは「葵文庫」所収のドイツ語書籍に、この「洋書調所」の長方形朱印は無かったし、また、この「洋書調所」の長方形朱印はあまり見いだされていないとされている<sup>8</sup>から、この発見は注目すべき



写真9

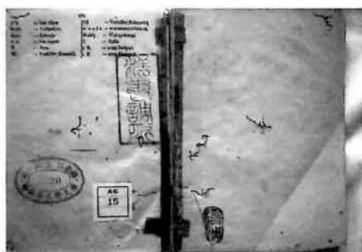


写真10



写真11



写真12

ものと言え。しかも裏表紙の見返しの右下に「開成所句讀本」と墨書されていることから、「早稲田大学」本は洋書調所の後身の開成所で「独逸学」の教材として実際に使用されたと考えて、大過ないであろう。この「早稲田大学」本は明治維新後に開成所から静岡学校には移らず、「山岸文庫」の朱印があることから、やがて早稲田大学教授であった独文学者山岸光宜(1879-1943)の蔵書となり、この後に早稲田大学図書館に所蔵されたものと言えよう。他方、「武蔵大学」本は所蔵印から判断する限り、文久二年に洋書調所で刊行された後、洋書調所・開成所といった徳川幕府の直轄教育機関に所蔵されことはなく、佐藤なる人物の私有本に、「木邨信造記念文庫印」があることから同文庫収録本になり、その後、既述のように武蔵高等学校によって昭和十四年七月一日に購入され、同高等学校の後身である武蔵大学の図書館の蔵書となったものと言えよう。

### 3

『獨逸單語篇』の構成についてであるが、22の分野に分けて合計1780のドイツ語の単語が定冠詞を付けて収録されている。その22の分野の題目を意識し—今日のドイツ語からして正確でないと想われるものが散見するので—、各分野に収録されているドイツ語の単語数を示せば、以下の通りである（〔 〕付きの数字は、論者が便宜的に附したものである。題目のドイツ語の単語の綴りや語尾変化に明らかな誤り、直ちに誤りとは言えないまでも、今日のドイツ語の単語の綴りや表記に合致しないもの等も認められるが、ここでは語学そのものの問題は取り上げない。）。

- [1] 世界と元素について：32
- [2] 時間と四季について：47
- [3] 食べ物と飲み物について：114
- [4] 血縁者について：60
- [5] 人間とその部分について：116
- [6] 罹病と障碍について：90
- [7] 生業と手仕事について：108
- [8] 男性及び女性の衣服について：83
- [9] 研究と筆記具について：64
- [10] 家屋の部分及び家財について：82
- [11] 台所及び地下貯蔵室で見られるもの：59
- [12] 厩舎で見られるもの及び騎行に使われるもの：59
- [13] 庭仕事、花及び樹木について：51
- [14] 鳥類について：68
- [15] 魚類について：47

- [16] 四足歩行動物について：66
- [17] 匍匐動物、害虫及び蟻虫について：54
- [18] 金属と色彩について：45
- [19] 田園及び都市で見られるもの：61
- [20] 舞踊と楽器について：48
- [21] 諸国と諸民族：156
- [22] 軍事用語：272

収録単語数が多い順に3分野を挙げれば、[22]・[21]・[5]順であり、しかも[5]の分野と[6]の分野は関連性が深いわけであるから、これを合計すれば単語数は206となり、[22]の分野の収録単語数に次ぐものとなる。そうすると、この『獨逸單語篇』の編者がドイツ語の研究・教育の実践的課題として目指しているものが、第一に軍事―[22]の分野が他の21の分野に夫々収録されている単語数に比して圧倒的に多いことには注目に値する―、第二に医学、第三に外交に関することであったと言えよう。<sup>9</sup>しかしながら、「葵文庫」本の場合は[1]の分野の32、[2]の分野の内の43、[3]の分野の内の17、合計92の単語の訳語が朱書されるだけに終わっている。また、「早稲田大学」本の場合は、[1]から[19]までの分野の内の1235の単語の訳語が朱書あるいは墨書されているだけに終わっている。そうした点に、幕末期における独逸学者の様々な限界性や彼らの置かれた歴史的状況が露呈しているとも言えよう。

ここでは、上述したように、訳語が一切書き込まれていない「武蔵大学」本を除き、「葵文庫」本に書き込まれている92の単語の訳語と「早稲田大学」本に書き込まれている1235の訳語の内、上記の92の訳語の異同についてのみ、論の展開に必要な限りにおいてのみ、考察しておきたい。その前に、一言しておくべきは、書き込まれている、ドイツ語の単語に対応する訳語の殆ど総てが、左から右に横書きされており、本書の辞書的な性格の故に、このような横書きにされている点である。<sup>10</sup>

[1]の分野に収録されているものは、地球や天象（月・星等）や気象（雨・風等）乃至自然現象（霜・氷等）に関する32の単語である。

先ず言及しておくべきは、*Blitz*の訳語として「葵文庫」本において「電」と朱で記入されていることから、この単語は*Blitz*のつもりが、*tz*を*β*と誤って刷っていることである。また、*Donnerkeil*は雷神の矢といった位の意味であろうが、採録する時にはそこから転じた自然現象を意味する単語として、この分野に入れて刷ったとも想われる。「葵文庫」本では「電石」という訳語が記入されている。それに対して、「早稲田大学」本では*Blitz*の訳語として「稲光」と記入されており、更に*Donnerkeil*の訳語としても「稲光」が記入されている。また、*Donner*の訳語として、「葵文庫」本においては「雷」と朱で記入されているが、「早稲田大学」本では記入されていない。

[2]の分野に収録されているものは、月や四季や曜日や朝晩等の呼称に関する47の



単語である。「葵文庫」本の場合、Morgenröhte と Abendröhte との訳語が未記入である。「早稲田大学」本の場合、Morgenröhte に「晨」と Abendröhte に「黄昏」と訳語が墨書されているから、この二つの単語の意味も最初は分からず、後に追記されたと言えよう。そして、注目されるべきは、Sonnabend の訳語が「土曜日」、Augenblick の訳語が「一瞬時」と朱書されているが、横書きされた他の訳語とは全く異なる横転縦書であり、後に記入されたと判断される。「早稲田大学」本の場合、Augenblick の下に朱の下線が引かれ、この単語が刷られている 1 丁裏、つまり 2 頁の上欄に augenblick (sic!) と朱書され、更にその上に「瞬」と朱書されている。従って、「早稲田大学」本の場合も、最初この単語の意味が分からず、後に上欄にこのように追記されたと言えよう。それ故に、最初不明であった単語の意味が、両者ともに後に追記されたということは、この両者のそれぞれの訳語記入者に交流があったとも推測される。

「早稲田大学」本は〔5〕の分野までの単語の殆ど総てに対し朱書されており、それらの一部に墨書で訂正訳語が加筆などされている。そして〔6〕・〔7〕・〔8〕の分野のかなりの数の単語に対し訳語が朱書され、この 3 分野のその他の単語には訳語が墨書されている。そして、〔9〕から〔19〕までの分野の殆どの単語に訳語が墨書されており、〔1〕から〔19〕までの分野の単語の約 81 パーセントに訳語が書き込まれている。それから、朱書の訳語も墨書の訳語も筆跡は同じであることから、「早稲田大学」本は一人の人物によって訳語が記入されていると判断出来る。しかも、既に指摘したように、「早稲田大学」本の場合は裏表紙の見返しの右下に「開成所句讀本」と墨書されていることを勘案するならば、多数の訳語が記入されたこの「早稲田大学」本は開成所において「独逸学」の研究・教育の中核的人物の手沢本であったと推測される。

#### 4

既に述べた様に『蘭獨逸單語篇』の扉には「洋書調所」と刷られているが、編者名は挙げられていない。こうした意味からも、そこに採録されている 1780 もの単語の版下を書いたのは誰であるかを考察することは、重要だと言わなければならない。

安政二年一月に天文方蕃書和解御用掛が独立せしめられ、洋学所が設立されたが<sup>11</sup>、安政三年二月に洋学所は蕃書調所と改称されたが<sup>12</sup>、文久二年五月に蕃書調所は洋書調所と改称され<sup>13</sup>、更に文久三年八月に洋書調所は開成所と改称されている<sup>14</sup>。『蘭獨逸單語篇』が刊行された文久二年冬に洋書調所において「独逸学」の研究・教育に従事していた中心的人物としては、市川兼恭 (1818-1899) と加藤弘之 (1836-1916) を挙げる事が出来る。安政三年三月二五日に「蕃書調所教授手傳」を拝命した<sup>15</sup>市川は、萬延元年七月十七日に「受獨乙学之命」、つまり独逸学の研究等につい

て内命を受け、同年八月七日に酒井右京亮から「獨逸國之學引請取扱同國之辭書編集等も致候様」申渡され、つまり「獨逸學公命」を受けている<sup>16</sup>。また、萬延元年閏三月十日に「蕃書調所教授手傳」を拝命した<sup>17</sup>加藤は、文久二年二月二三日に「獨逸國之學引請取扱同國之辭書編集致し候様」命じられている<sup>18</sup>。従って、『獨逸單語篇』を編集したのは、市川に加藤、あるいはこの両者のいずれかということになるであろう。

市川の長子の同文吉(1847-1927)が幕命によってロシア留学に出立する直前の慶應元年四月に、開成所の洋学者等が夫々の得意の外国語で錢の言葉を記した文集<sup>19</sup>の中に、市川および加藤が夫々ドイツ語で識したものを見出すことが出来る。市川は長文の、且つ達者なドイツ語の文章を書いており、綴りや文法上の誤りは少ない<sup>20</sup>。他方、加藤は比較的短く、やや簡単なドイツ語の文章を書いているに過ぎない<sup>21</sup>。この両者の夫々の筆跡と『獨逸單語篇』に採録されているドイツ語の単語の記され方を比較してみると、明らかに加藤のものとは違っており、大文字の場合W・V以外の総てが、小文字の場合は大略殆どが、市川のそれらと一致することを見出し得た。従って『獨逸單語篇』に採録されている1780もの単語の版下を書いたのは、市川であると判断してよいであろう。また、開成所において「獨逸學」の研究・教育の中核的人物の手沢本であったと推測される早稲田本『獨逸單語篇』では幾つもの丁の上欄にドイツ語の単語や訳語の書き込みが見られるが、それらは、そこに刷られたドイツ語の単語-市川がその版下を書いた-、各単語に対して朱書あるいは墨書された訳語-上で論証したように開成所における「獨逸學」の研究・教育の中核的人物が記入した-と筆跡が一致する<sup>22</sup>。市川が記した『浮天齋日記』なる日記の原本がほぼ完全に残っており、幕末期の獨逸學関係の非常に貴重な一次史料となっているが、そこにある和文の筆跡やオランダ語の綴り方も、『獨逸單語篇』に刷られたドイツ語の単語の綴り方と、早稲田本『獨逸單語篇』に書き込まれたドイツ語の単語の訳語の筆跡と、更には幾つもの丁の上欄に書き込まれたドイツ語の単語の綴り方や訳語の筆跡と、大略一致する。従って、早稲田本『獨逸單語篇』のドイツ語の単語の訳語や幾つかの丁の上欄にドイツ語の単語と訳語の書き込みをした開成所における「獨逸學」の研究・教育の中核的人物は、市川兼恭であるという結論に達すると言えよう<sup>23</sup>。

その市川が『浮天齋日記』の文久二年三月廿五日の条に「託單語篇坪井」<sup>24</sup>と記しており、この日記では日々のことが極めて簡明にしか書かれていないことから、この場合も解釈が難しいが、『獨逸單語篇』の扉に「文久壬戌之冬刻成」とあることを勘案するならば、時期的にみて『獨逸單語篇』を刷る為に、その草稿が市川から坪井なる人物-現在のところこの坪井については、それを特定出来るだけの一次史料は見出せない-に託されたという解釈が可能である。そうしたことから、この『獨逸單語篇』の編者も先ずは市川兼恭であった-そこに加藤弘之の参加があったのであろう

がーと判断して、大過あるまいと言えよう。そのことは、市川が萬延元年八月七日に受けた「獨逸学公命」、即ち「獨逸國之学引請取扱同國之辞書編集等も致候様」申渡されたこと一文久二年二月二三日に加藤もほぼ同様に命じられたこと一の後半部分である「獨逸國」の「辞書編集」ということが、先ずもって『獨逸單語篇』の文久二年冬の刊行によってある程度は果たされたということになるであろう。

また、『浮天齋日記』の文久二年六月十七日の条に「獨逸文典活字校合」<sup>25</sup>と記されており、既に述べたように、(2)のH.Weiffenbachの著書の一部を活版印刷によって復刻した(8)が文久三年に刊行されているから、「獨逸文典」とはこの(8)の本のことと判断され、『獨逸單語篇』に次いで、文久二年の半ばには(8)の本の校正作業等が着手されていると考えられる。そして、『浮天齋日記』の文久三年二月十二日の条に「鈴木進兵来、託文典」<sup>26</sup>と記されており、ここに言う「文典」とは(8)の本を指していると考えられる。

『浮天齋日記』萬延元年十二月朔日(1861年1月11日)の条に「李漏生よりテレグラフ献上之趣キ傳習致し度申候間右傳習可致旨出雲守殿より被仰付」<sup>27</sup>とあり、同月三日に「行赤羽根接遇所テレグラフ傳習」<sup>28</sup>とあり、同月四日<sup>29</sup>・五日<sup>30</sup>・六日<sup>31</sup>・十日<sup>32</sup>・十一日<sup>33</sup>・十二日<sup>34</sup>・十三日<sup>35</sup>・十六日<sup>36</sup>に「赤羽根」あるいは「接遇所」を訪れたとされている。市川兼恭の旧藩主であった松平春嶽の陳述『靜軒筆叢』の萬延元(1860)年の条によれば、「市川恭十二月十九日參謁せり、(中略)恭ブンゼンニイフ所ハ、テレグラフ伝習は名とする所にして、多く書を読みて考トキハ了解せり、恭本意とする處は獨乙オールドを学ばんと欲せり(後略)」<sup>37</sup>とされ、プロイセン使節団の滞在する赤羽根接遇所を市川が訪れた本意はドイツ語を学ぼうとするところであった。萬延元年に条約締結交渉のために来日したプロイセン使節団の報告書である『公的資料に基いた東アジアへのプロイセンの遠征』(*Die preussische Expedition nach Ost-Asien nach amtlichen Quellen, Berlin 1866.*)には市川と思しき人物が赤羽根接遇所に来訪していることが確認出来、しかも市川と思しき人物の注目すべき言動が描かれている。「大君(Taikūn)への最後の贈答品」は「持ち込まれた電信機の運用を公使随員フォン・ブンゼン(von Bunsen)の指導で学んでいた日本人学者達(Gelehrten)の明らかな驚嘆を惹起し」、「電信機」の講習に赤羽根接遇所に派遣されたその「学識ある役人(Yakunine)」の「一人」が「フォン・ブンゼン氏にドイツの活字でもってブレダ(Breda)にて我々の言語で印刷された入門書(Leitfaden)を示しつつ」、「これを私は教えなければならない、これが私の業務である。(Das muss ich lehren, das ist meine Bedienung.)」とドイツ語で述べたのである<sup>38</sup>。ここにいうブレダで印刷された「入門書」とは、明らかに(2)のH.Weiffenbachの著書であり、それを教えることを、萬延元年に「獨逸学公命」を受けた直後に、市川は自分の「業務」と看做している。この本を部分的に復刻した(8)の本が文久三年に

活版印刷によって刊行されているが、それは市川が萬延元年に受けた「獨逸学公命」、即ち「獨逸國之学引請取扱同國之辞書編集等も致候様」申渡されたことの前半部分である「獨逸國之学引請取扱」に含まれることであり、市川が自覚する「業務」を果たすためのことであつたと言えよう。

萬延元年十二月に締結された「日本國普魯士國修好通商條約」の第21条によれば、プロイセン側からの外交文書は条約締結後の「五箇年の間は日本語又は和蘭語の譯を添ゆ」るが、その後は「獨逸語を以て書すへし」<sup>39</sup>とされていたが、慶応三年十一月十七日に幕府側はプロイセン公使フォン・ブランドに「開成所に於いて獨逸学科相開き語生修行相被尽候処いまた熟達之者此無」に就き「是迄通り蘭文語相添被差掛候いたし度候」<sup>40</sup>と稟議を願っている。従って、開成所における市川等による「獨逸学」の教育の元での「語生修行」は必ずしも順調に運んでいなかったとも判断される。その反面、慶応三年六月十八日付け小笠原老岐守宛て書翰において、フォン・ブランドは「余近頃江戸に滞留せし間に欧羅巴学校なる開成所を尋訪の機会を得たり此学校にて獨逸語を教授する為め十分なる法則を設けたるを見て甚た満足せり」<sup>41</sup>と陳述しており（『浮天齋日記』慶応三年五月廿二日の条にある「出開ブランド来」<sup>(77)</sup><sup>42</sup>という陳述は「開成所に出勤、ブランド来る。」と解され得るので、同日にフォン・ブランドが開成所を来訪したことを確認し得るのである。）、市川等の開成所における「獨逸学」の教育が高く評価されている。

このように一次史料に立脚して厳密に考察するならば、市川等による「獨逸学」の研究や開成所における教育は、一定の限界を持つものの、ある程度の着実な成果を挙げている側面を持ち、文久二年冬に刊行された『獨逸單語篇』は市川を中心にした幕末期の「獨逸学」の研究に最初に築かれた橋頭堡だったのであるまいか。

## 注

- 1 『近畿大学中央図書館報 香散見草 36号』（平成19年）19-29頁。
- 2 『獨逸單語篇』（洋書調所 文久壬戌之冬刻成）静岡県立中央図書館蔵「葵文庫」AG19。『國書総目録 第二巻』（岩波書店 昭和六四年）358頁には、本書の書名が『官板獨逸單語篇』とされているが、「官板」は明らかに誤りであり、しかもこれは角書であるから、文字のポイントを落とすか、この論文のようにと「獨」と表記すべきであろう。また、同頁では「葵文庫」だけの所蔵になっている。
- 3 『獨逸單語篇』（洋書調所 文久壬戌之冬刻成）早稲田大学図書館蔵 文庫08-e 0052。

- 4 『獨逸單語篇』（洋書調所 文久壬戌之冬刻成）武蔵大学図書館蔵 844-2。
- 5 ここで言う独逸学とは、狭義にはドイツ語の研究、広義にはドイツ語を通じての科学・文化・技術等の研究と考えておきたい。
- 6 前掲拙稿23頁。
- 7 石田徳行「葵文庫の概要～江戸幕府旧蔵所のコレクション～」（伊豆文学フェスティバル実行委員会編集・発行『「しずおか」の貴重所』平成十七年）1頁。
- 8 「Digital葵文庫～静岡県立中央図書館～」(<http://digitaltoshokan.pref.shizuoka.jp/aoi/>)。
- 9 福岡万里子「幕末のドイツ認識と日独関係の起源—洋学者市川斎宮における「独乙学」の考察から—」（『ヨーロッパ研究』特集号「ヨーロッパとアジアの間」平成十七年）48-50頁では、市川に命じられた「独乙学」の「最重要部分」が「兵学ないし軍事科学とそれにかかわる精錬学（化学）」とされているが、それが依拠する具体的な一次史料は示されていない。
- 10 横書きの登場については、屋名池誠『横書き登場—日本語表記の近代—』（岩波書店 平成十五年）において詳細に考察されているが、著者自身が言う様に、幕末期の蘭学書・洋学書の事例をもっと見るべきであろう。
- 11 大槻如電修『新撰洋学年表』（昭和二年 伯林社書店）140頁。
- 12 前掲書141頁。
- 13 前掲書147頁。
- 14 前掲書148頁。
- 15 市川兼恭『浮天齋日記』（以下、この史料は『浮天齋日記』と略称する）第五巻 収録履歴 東京大学史料編纂所蔵 維新Iは1286・3-4。
- 16 『浮天齋日記』第三巻。
- 17 加藤弘之先生八十歳祝賀會編輯『加藤弘之自叙傳』（大正四年 日清印刷）所収「加藤先生年譜」3頁。
- 18 文久二年二月廿三日「覚 古賀謹一郎妻木田宮江」（『開成所伺等留 乾』（東京大学史料編纂所蔵 外務省引継書類・39.）収録）
- 19 山岸光宣編『幕末洋学者歐文集』（昭和十五年 弘文荘）
- 20 山岸光宣編『幕末洋学者歐文集』3-4頁。山岸光宣編『幕末洋学者歐文集解説』（昭和十五年 弘文荘）34-35頁。
- 21 山岸光宣編『幕末洋学者歐文集』11-12頁。山岸光宣編『幕末洋学者歐文集解説』（昭和十五年 弘文荘）35-36頁。
- 22 例えば、分野 [11] に収録されている単語Futterswindeの語尾にgeと朱が入られ、更に上欄に誤りという意味か△Futterswinde と墨書され、その後ろに正しいものとしてFutterschwingeが記入されているが、この三つの単語は綴り方が同

一人物のものと言える。

- 23 宮永孝『日独文化人物交流史：ドイツ語事始め』（三修社 平成五年）163頁でも、『獨逸單語篇』の編者を市川兼恭としているが、一次史料によってその根拠が充分にされているとはいいがたいのではあるまいか。
- 24 『浮天齋日記』第三卷。
- 25 『浮天齋日記』第三卷。
- 26 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」（『大学史研究 第23号』平成二十年）61頁参照。
- 27 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 28 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 29 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 30 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 31 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 32 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 33 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 34 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 35 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 36 『浮天齋日記』第三卷。注1の拙稿25頁、拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 37 原平三が松平春嶽の『靜軒筆叢』の萬延元(1860)年の部分を筆写し、その論文「幕末の獨逸学と市川兼恭」（『史学雑誌』第五十五編第八号 昭和十九年）に採録したものによる。『靜軒筆叢』は戦災で消失したと考えられる。拙稿「独逸学事始」60頁参照。
- 38 *Die preussische Expedition nach Ost-Asien nach amtlichen Quellen*, Bd. 2, Berlin 1866, S.146. 注1の拙稿26頁。1860年に日本に派遣されたプロイセン使節オイレンブルクの「1861年1月14日付け書簡」によれば「向かいの長い壁の際に2台の電信機の器具が然るべき距離をおいて設置され、その円盤に私が日本の文字を書かせたが、数日来二人の日本人官吏がその器具を練習している」（Herausgegeben von Graf Philipp zu Eurenburg-Hertefeld, *Ost-Asien 1860-1862 in Briefen des Grafen Fritz zu Eurenburg*, Berlin 1900, S.149.）とされており、ここで述べられている「二人の日本人官吏」の一人は『浮天齋日記』や『靜軒筆叢』の先に引用した部分から見て、市川等であることは間違いない。もう一人は加藤弘之であろうと推測されるが、その根拠となる一次史料は、現在のところ見出せない。
- 39 「日本國普魯士國修好通商條約萬延元年庚申十二月十四日（西曆千八百六十一年第一月二十四日）於江戸調印 文久三年癸亥十二月十三日（西曆千八百六十四年

一月二十一日) 同所本書交換」(内閣記録局編『法規分類大全 第二十二卷』明治三十三年) 420頁。拙稿「独逸学事始」63-64頁。

40 通信全覧編集委員会編『續通信全覧 編年之部 一五』(雄松堂出版 昭和五十五年) 346頁。拙稿「独逸学事始」64頁。

41 通信全覧編集委員会編『續通信全覧 編年之部 一五』(雄松堂出版 昭和五十五年) 205頁。拙稿「独逸学事始」63頁。

42 『浮天齋日記』第四卷。拙稿「独逸学事始」63頁。

後記：本編に掲載した写真1・4・9・10・11・12は静岡県立中央図書館の許可を得て撮影したものである。写真2・5・6は早稲田大学図書館の古典籍データベースより許可を得てロード・ダウンしたものである。写真3・7・8は武蔵大学図書館で複写されたものである。史料の調査・掲載を許可頂いた静岡県立中央図書館・早稲田大学図書館・武蔵大学図書館(順不同)に謝意を表したい。